修士論文要旨

# 桶谷式断乳による母子関係の変化

## Changes in the mother-child relationship by termination of breastfeeding in OKETANI method

相川　公代（Kimiyo Aikawa）　　指導：根ヶ山　光一

**【問題と目的】** 離乳方法の一つである「桶谷式断乳」は親主導型であるが、母子の心身の状態を勘案して行うため子主導の要素も含んでいる。筆者は母乳支援において「桶谷式断乳」が母子関係にとって重要な意味を持ち、母子を成長させ自立を促すと感じている。本研究では「桶谷式断乳」で母子にどのようなことが起き、どのような影響があるのかを客観的に明らかにし、それをもとに親子の反発性が持つ発達上の意味を考察することを目的とする。

### －研究１　桶谷式断乳を行う母子の観察－

断乳実施直後の母子の観察により母子に何が起こっているのかを考察する。

**【方法】** 平均月齢１歳５ヵ月の子どもとその母親5組を対象に、断乳前後の母子の様子をビデオカメラで観察した。

**【結果と考察】** [最後の授乳場面]と[子どもが断乳を実施し初めて母親の乳房を提示される場面]を比較すると、子どもは前者では母親に意識を向けること、母親の発生への反応がほとんどないが、後者では積極的に意識を向け、母子のやり取りが観察され、子どもが母親の「乳房」と「顔」を交互に見るという特徴的な行動を生起させていた。乳房の提示は子どもにとって新奇なことで母親に対し社会的参照・共同注意をしていることが示唆された。

### －研究２　桶谷式断乳を実行した母親への追跡インタビュー－

断乳後の１～２か月間の母子の」関係性の変化を母親の語りの中から考察する。

**【方法】** 「桶谷式断乳」をした22名の母親（母親の平均年齢34.5歳、子どもの平均月齢1歳８ヵ月）を対象に、断乳後「３日目」「10日目頃」「１ヵ月目頃」に半構造化インタビューを実施した。

**【結果と考察】** 時間の経過に伴い順次「断乳続行への迷い」「迷いの払しょく」「子どもとの関係の再構築」の各カテゴリーが抽出された。どの段階でも親の思いにはゆらぎがあり、両価的感情を抱えながら「断乳」を受けとめ、子どもとの関係性の変化に対応していた。各段階の期間は母親によって異なり、身体的苦痛が関与していることが示唆された。また、桶谷式認定者の関わりは、母親の肯定的な断乳の受け止めに影響を与えている可能性も示唆された。

### －研究３　過去に桶谷式断乳を経験した母子への回想的質問紙調査－

離乳を経験した青年期以降の子どもとその母親が、そのライフイベントをどのように意味づけているのかを質問紙調査で考察する。

**【方法】** 子どもの年齢が18歳以上である103組の母子を抽出し調査用紙を郵送した。母親には、子ども・母乳を与えたこと・母乳育児の終わり方、子どもには、母乳で育てられたことを中心に尋ねて回答結果を分析した（エクセル統計2010使用）。

**【結果と考察】** 母親39名、子ども36名から返信があった。母親の平均年齢54.0歳、子どもの平均年齢20.8歳であった。半数近くの母親は過去の断乳に対して両価的な感情を抱え続けていたが、子どもには影響がないことが示された。また断乳の実施が子どもに直接的な影響を与えていたとは考えにくい。

「桶谷式断乳」で子どもは乳房を対象化し、母子は乳房を介することに左右されない関係性を築き、自立が促される。それは長期的に観ても子どもに悪い影響はないことが分かった。動物行動学的に霊長類は相互自立の意味で「断乳」をする。「断乳」は「子別れ」で、健全な反発性は関係性の再構築ができるといえる。